猫蓑通信

第77号

平成21年
（2009年）
10月15日発行
（年4回発行）

明雅先生を偲ぶ

青木秀樹

東明雅先生が八十八歳の天寿を全うされ、永眠されたのは平成十五年十月二十日未明であった。私が武井雅子様からお知らせを受けて、病院にお見舞いに駆けつけたのは十月七日。そして事務局の松本碧さんと同道して、新庄市で開催された国民文化祭と猫蓑会十月例会での正式俳諧の報告に伺ったのが同十六日であった。それが生前の先生にお目にかかった最後になった。先生の大きくて、しかも柔らかく、発熱のため温かかったあの日の手の感触を忘れることができない。

時の移ろいは早いもので、この十月明雅先生の七回忌を迎えることになった。今年の猫蓑同人会は、八十歳を超えたメンバーが出席者の二割近くを占め、連句の基本を身につけていれば年齢に関係なく連句を楽しめることが証明されたように思う。会員の高齢化が進むものの、一方で新しい会員の参加を得て、猫蓑会の規模は六年前とほとんど変わっていない。先生の残された「猫蓑の連句」を伝えていくエネルギーが会員各位に宿っていることの証であろう。指導的立場の方々をはじめ、会員各位に敬意を表したい。

ところで、私たち猫蓑会会員の大部分は明雅先生の晩年二十二年間だけ時間をともにしたことになる。大正四年（1915）に熊本市で誕生され、昭和五十五年（1980）信州大学を定年退官し名誉教授になられるまでの先生の人生の四分の三のことはほとんど知らない。宮坂静生氏を中心にまとめられた東明雅先生追悼集『鶴一羽』には信州大学での先生の思い出が語られているが、その中に信濃毎日新聞に十回にわたって連載された明雅先生ご自身が書かれた「来し方の記」（昭和五十九年三月）が転載されている。そこには昭和二十年八月以降のことが記されており、晩酌をするようになったことや白髪になった原因などとともに、西鶴研究に進む師との出会い、俳諧研究への師との出会いが語られている。連載最終回には、「世をしのぶ仮の姿」の大学教官から本来の姿の「俳諧師」に転進することのよろこびが記されている。根津芦丈師と出会ってから俳諧の伝統継承に情熱を傾けられた明雅先生の心情が語られている。

明雅先生は常々「芦丈先生の教えを継承しているだけ」と記されていた。芦丈師の教えは『芦丈翁俳諧聞書』や「山襖」各号に書かれているものから知ることができるが、明雅先生はそれに独自の俳諧研究の成果を加味され、連句の復興・発展と良質の連句作品を生み出すために、現代人に合うよう微修正を加えられて私たちに教えてくださったものと私は思っている。

先生と連句の座をともにさせていただいたエピソードは多々あろうが、多くの方が経験されているのは、大きな手を伸ばして付句を催促されたこと、ほっほっと笑いながら「面白いことを言うね」と褒めてくださったこと、先生の付句はすべて速吟で、意味明瞭で具象的であったこと、当意即妙でユーモラスな句が多いこと等であろう。初心者には「何か書いてくれなくては直しようがありません」、自他場に関しては「つべこべ言えればここは採りましょう」、先生のご存じでない事物が詠まれた句には「これは何ですか」、難解句には「この句は何を言っているのですか」などのやりとり、「前句の続きや前句の説明はいけません」、「恋というのは肉欲のことではないのです」等、先生の語録はいくつもある。

先生の教え方は教室の講座では基本を説かれるので教条的であっても、連句の座ではその人の習熟の程度をみて柔軟に判断をされていたように思われる。明雅先生の連句の教えは簡単に言えば、「厳しさとおおらかさの共生」になるのではなかろうか。

『季刊連句』発刊の辞

東　明雅

昭和五十八（一九八三）年六月一日刊『季刊連句』創刊号より転載

先師根津芦丈翁が卒寿の高齢で、連句の専門誌「山襖」を発刊されたのは昭和三十九年のことであった。その「発刊の辞」には、沈滞・衰微の極にあった連句を歎き、もう一度、芭蕉の伝統を今日に復活させようという執念ともいうべき悲願が縷々と述べられている。それから二十年、連句界の様相は一変したと言ってよい。ことに昭和五十年代になってからは、相つぐ入門書の出版、各地における連句会の誕生、昨年はまた連句懇話会の結成、連句年鑑の発行など、まさに連句の復活を実証したものと言えよう。泉下の芦丈先生が聞かれたら、さぞかし驚かれ、満足されることであろう。

いわば、長い長い冬が去って、連句界にやっと雪解けの春が訪れたのである。そこにはさまざまの種が蒔かれ、既にいろいろの芽生えが見られる。それ故に、私どももこの際、先師の遺志をつぎ、先師から学んだ蕉風連句の種を蒔き、その芽生えを大切に育てて行こうと思う。ここに相計って「季刊連句」を発刊するのも、一に右の目的を達成する為に外ならない。

庶民の文芸であり、座の文芸である連句に、芭蕉以来の不易の格を守りながら、現代の流行に即した新しみを求め、万人の胸の琴線にひびく作品を創り出すのが、私どもの究極の願いである。その実現は極めて難しいに違いないけれども、先師九十の時のあの沸々とたぎる雄心を鑑として、いつの日か民衆の新しい真の文芸として認められる大輪の美しい花を咲かせたいと思う。

連句の復活とその将来

東　明雅

昭和五十八（一九八三）年六月一日刊『季刊連句』創刊号より転載

連句は今日奇蹟的に復活した。この「奇蹟的に」という言葉は、明治以後の連句がたどって来た沈滞・衰微の実状を目のあたりに見て来た人には、一種の感動を伴う実感として受けとられるものであろう。私も縁あって昭和三十六年から、この連句というおかしなものにいろいろとかかわって来たのであるが、当初は連句と言えば、非文学という言葉が鸚鵡返しに返って来、連句の復活を説けば時代錯誤の標本のように思われて、世人の連句アレルギーとでもいうべきものに、少なからず悩まされたものであった。

なぜ世人はこのように連句に冷たく、邪慳だったのか、今さらに恨みつらみを述べても仕方がないのだが、そのような人たちは皆次のように思っていたのだ。連句はもう滅んでしまった。日本の文学史を眺めても、一度滅んだものは、いくら人為的にその復活をはかっても成功したためしはない。今ごろになって連句の復活を叫ぶのは、日本の詩歌の展開のあとを知らぬ愚かな行為であると、流石に私に直接言った人はなかったけれども、心の中では皆そのように思い、夢中になっていた私たちをひそかに同情して眺めていたのであろう。

その人たちの考えは一応尤もである。たとえば万葉集を例にとっても、四千数百首あるその歌の中には、短歌（五・七・五・七・七）の形式ばかりでなく、片歌（五・七・七）と呼ばれるもの、旋頭歌（五・七・七・五・七・七）と呼ばれるもの、長歌（五・七・五・七……七）と呼ばれるものなど、いろいろな形式が混在していたのであるが、短歌を除く他の形式は、次第にすたれ滅んで行って、今日は全くその影をとどめていない。江戸時代に建部涼袋（一七一九―一七七四）という者があらわれ、片歌を復活すべきだと、熱心に運動を展開したことがあった。そして彼の生きている間はそれでも幾らかは片歌形式が復活したかに見えたが、やがてそれは泡沫のように消えさり、涼袋は酔狂者の名を得たに過ぎない。また、鎌倉、室町時代に一世を風靡したのは連歌であった。その流行ぶりはすさましいばかりで、名人・上手も輩出したが、江戸時代になると全くその面影はなく俳諧に取ってかわられた。連歌を復活させようとする試みもあったに違いないが、すべて失敗したらしく、再び文学の表面に現われることはなかった。これらの例で分かるように、一度滅んだ文学形態は、誰がどのように努力しても、二度と復活しないものなのである。

それでは何故に連句は復活したのか。その理由は簡単である。連句はなるほど明治以後、文学の表面には殆んどあらわれなくなり、一般の人はもう滅亡してしまったものと早合点していたのだが、実は社会の片隅でその伝統を守る者があり、ひそかにこれを楽し

むグループも残っていて、その命脈は辛じて続いていたのが、明治維新から百余年を経て、西洋文学一辺倒であったものの見直しの時期が廻って来て、また表面にあらわれるようになったものなのである。

私はこの連句復活に似た現象を、平安時代初期の短歌の上に見るのである。奈良時代から平安時代初期にかけて、中国の文学・思想が海嘯のようにこの島国に押しよせて来た。その圧倒的な勢に日本在来の文学たる短歌は一時全く屏息してしまい、漢詩・漢文が世上を支配してしまった。そして、このいわゆる国風暗黒時代も約百年続いたあと、再び短歌は蘇る。延喜五年(九〇五)に編纂された「古今和歌集」はその復活の輝しい記念碑であり、その後の短歌の隆盛は万人の周知するところである。

右にのべた連句の復活と短歌の復活、この二つの相似た現象から、次のようなことが結論できるのではなかろうか。一、日本国民は圧倒的な外来文化の影響を受けた場合、約百年は全くそれ一辺倒になってしまうが、それが過ぎるとまた自らの伝統を思い出し、復活させようとすること。二、連句も短歌も社会の表面では滅亡したかに見えたが、なお伝承・愛好する者が潜在しており、それ自身の命脈が尽きていなかった為に蘇生し復活することができたということ。これは先に例をあげた片歌・旋頭歌・長歌、あるいは連歌などが、その寿命が尽き、新しい時代に蘇生する力を失ってしまっていたのとは全く違うのである。

だから、片歌・旋頭歌・長歌、あるいは連歌を復活させようとすることは、それこそ文学の流れを知らぬ時代錯誤であるけれども、短歌・連句を蘇生させることは、決して文学の流れに逆らったことでもなく、時代錯誤の譏りにも当らぬのであり、これを譏る人こそかえって自らの無知を暴露するものであろう。このような認識は、今後連句復活の先頭に立つ者を大いに勇気づけるものであるに違いない。

さて、右に述べたように、短歌は一度全く表面的には衰滅してしまったあと、「古今和歌集」で花々しく復活し、その後の隆盛はすばらしく千年後の今日に及んでいる。連句も同じく衰退し、仮死状態にまで陥ったあと復活したのであるから、今後はできるだけ広く、できるだけ長く、国民の多くに親しまれる文芸として存在して欲しいと思う。もちろん今日は国民の生活や思想や価値観も多種多様の時代であるから、今後も連句の存在、あるいはその文芸性を否定する人も多いだろう。しかし、それはむしろ当然のことであり、もし国民全体が一致して連句の復活に賛成し、尽力するということになったら、その方がよほどおかしく無気味でさえあろう。反対の意見のあることを気にしてはならない。また、同じく連句の復活を願うにしても、その考え方、方法は人によってまちまちであろう。私はそれでよいと思うし、無理に統一することの方がおかしいと思う。たとえば形式や式目なども自然とある方向にむかいそれが固定するのはよいけれども、人為的に無理に一定しようとすると必ず破綻するだろう。戦争中にこれに類したことが行われ、昭和式目なる不完全なものが押しつけられた苦い過去が思い出され、今もよい気持がしない。よい作品・すばらしい作品は、どんな形式でも、どんな式目を使っても存在しうるだろう。

このように言うと、形式も式目もどんなにしてもかまわないと言っているように聞こえるだろう。実はその通りなのである。せっかく連句を復活させたからには、それを時代や社会に適合するように、第一、自分に気に入るように新しく変化して行くべきである。いつまでも芭蕉の時代の形骸を守るだけでは、それこそ本当に連句の命脈は尽き、片歌・旋頭歌・長歌、あるいは連歌と同様の運命に陥ることであろう。だから、内容の上でも、形式の上でも、変化すべき理由が十分に認められるならば、変化させてよいし、積極的に変化させなければならない。しかし、いくら変化させ変貌させても、連句という文芸であるからには、それにふさわしい本質だけは絶対に失ってはならないと思うのである。

連句の本質とは何か、たとえば連句は座の文学と言われる。これも確かに本質の一つであるが、座を排除しても連句は存在しうる。現に独吟という形式があるからである。また、連句の本質は俳諧、すなわち滑稽・諧謔であると言うが、これは芭蕉の時代になると否定された。あるいは挨拶であり、即興であるとも言う。これらも大切なものに違いないが、挨拶・即興がなければ連句ではないとは言えないだろう。私は連句が将来いかに変化・変貌しようとも、絶対に失ってならぬものは、作品を創り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムであると思う。付句は前句にのみついて、打越の句とは全く縁がない。このような関係を何回も何十回も繰り返して一巻の作品が創り出される。このような詩制作の手法はどこの国の文芸にも見られない、私どもの先祖が新しく創り出した独自のものである。究極においては、この独自の運動・メカニズムさえ失わなければ、その一巻がどのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも、私はそれを連句と認めようと思う。

ただし、私は今すぐに極端な変化・変貌をしなければならぬ納得のゆく理由を発見できない。それで今しばらくは先師芦丈翁の教えにまかせ、蕉風伊勢派の伝統を守り、その中で真の新しさを摸索して行きたいと思う。

第十九回　猫蓑同人会作品　1～4

1・筒鳥の座

歌仙「羽根あるもの」　原田千町　捌

万緑や羽根あるものを生れしむ　千町
蓮の浮葉を揺らす漣　冬乃
トルソーの肌滑らかに磨きゐて　一枝
ちょっと休憩珈琲の刻　郁子
軽快な序曲と共に昇る月　弘子
団栗ころころにこやかな嬰　政志
ウ　茸狩りけふの収穫料理して　郁
次から次と読ます釣書　乃
銀幕の人に恋してゐるばかり　弘
弁護士稼業抽斗に銃　乃
書類ごと盗まれちゃったオープンカー　志
敷石続くフィレンツェの街　枝
「かぐや」落つ月の映像冬ざれて　志
非番に独り呷る燗酒　弘
駅長の敬礼すこし身を反らせ　枝
吾子に教はる馴れぬパソコン　郁
支へられ薄墨桜花見事　同
狂言役者名乗りのどかに　乃
ナオ　紙風船僕が遊んであげようか　弘
デイサービスで習ふ体操　乃
超人気二十歳の盲人ピアニスト　志
平和愛せよ首相跡継ぎ　枝
戻せないことばかりあり走馬灯　弘
夢の如くに響く郭公　郁
遠山の麓におはす阿弥陀仏　枝
尼となりたるまなざしの艶　乃
犬猫の睦むに似たる逢瀬にて　同
盗撮写真またも出回る　弘
高窓にくっきり嵌り月青し　枝
つづれさせ聞く綴れ刺しつつ　郁
ナウ　秋惜しみ世界を巡る船の旅　志
カードの届く南極の基地　弘
給付金初孫に買ふランドセル　同
書けばいよいよ長き自分史　乃
踏むも花仰ぐも花よ花並木　町
古人の曲水の宴　弘

連衆　百武冬乃　西田一枝　東　郁子
松原弘子　峯田政志

2・夏燕の座

歌仙「桜桃忌」　吉田酔山　捌

宿酔もよしと思へり桜桃忌　酔山
机上の疵をよぎる蚊の声　孝子
窯開く主門人息詰めて　暁巳
桐の下駄履き散歩ゆったり　英子
洋館のとんがり屋根に鎌の月　未悠
ハーバーライト滲むうそ寒　孝
ウ　出たがりの知事も市長も村芝居　悠
勘平さんに寄せる同情　巳
軽々と抱いてベッドに横たへる　英
巻き毛の女王片乗りの騎馬　孝
放射能漏れて隠して闇の中　悠
両界曼荼羅悟り導く　英
老人会葛湯一番人気にて　巳
ダウンジャケット月を纏へる　孝
改札をみなすいすいと通り過ぎ　同
よいしょ頼りに渡る世の中　巳
花万朶北山杉を彩りて　英
黄金週間どこも込み合ひ　悠
ナオ　サーカス団テント片づけ春愁ふ　巳
獄舎に綴る粛正の詩　孝
愚かさよ麺麭なきときは菓子を喰へ　巳
幹事の才はよろづ段取り　孝
実験の結果はいつも予想外　悠
落としたピアスそれが始まり　同
初デート速攻のキス浴びせられ　英
薬膳料理夏ばてに効く　同
板長の山椒魚にさも似たり　巳
ハイブリッド車税は軽減　孝
月面を登る地球の愛ほしく　巳
嬰児の見る新涼の夢　孝
ナウ　風炉名残青井戸茶碗あたためて　悠
足のしびれの忍びよる頃　巳
さまざまの時代を流す芥川　孝
まだまだ動く大正のレジ　悠
見上げたる朱の鳥居に花吹雪　山
東踊の揃ひ留袖　英

連衆　坂本孝子　島村暁巳　佐古英子
棚町未悠

3・翡翠の座

歌仙「ボサノバ」　大島洋子　捌

ボサノバの耳にやさしきついりかな　洋子
梔子の花香りくる径　良子
軽やかな黄色に染める衣ならん　了斎
ねぢまき時計集めるが趣味　泉子
地球儀の海を照らして望の月　ふみ
藻に住む虫の遊び心よ　泉
ウ　冠つけアルバイトする神嘗祭　良
ロングヘアーに天使の輪揺れ　斎
これまでに何度駆落ちしたことか　み
泥棒稼業妻は知らない　良
次々とシャネルグッチの貯まる棚　み
悴む膝に猫寝かす月　泉
地吹雪の彼方砲声聞いた気が　斎
加齢臭には緑茶石鹸　み
自民党世襲禁止を決められず　斎
峠の道を蛇行運転　良
咲く花に酒を捧げん馬上杯　同
剪毛期にはボーイソプラノ　泉
ナオ　耕しの土は生命の匂ひして　み
蠢くものと泳ぎだすもの　斎
ガラス片光散り寄る万華鏡　み
西瓜七つに切り分ける技　泉
麻雀の牌をおもちゃに育ちたる　み
手のつけられぬ嘘つきの性　斎
港町タトゥーに彫った恋心　同
未練たっぷり入れる雑炊　泉
理学部はすり鉢型の教室で　良
隣の客は無表情なり　同
月明に即身仏を拝みつつ　斎
鬼の捨子の軒にゆらゆら　み
ナウ　大き手の父の作った木の実独楽　斎
ちょっと眇で見る癖のあり　良
縦走の八甲田山越えたやら　泉
茜の雲に鳥の群行く　良
花人で臨時改札賑へる　洋
甘さ程良き名代草餅　泉

連衆　本屋良子　鈴木了斎　青木泉子
中村ふみ

4・時鳥の座

歌仙「白靴や」　式田恭子　捌

白靴やためらつて飛ぶ水たまり　恭子
四葩のならぶ街の公園　ゆみを
キルティング布地とりどり持ち寄りて　雅子
ワッフル焼けば香りただよふ　志世子
窓開けて昇りそめたる月仰ぎ　淳子
根釣の舟の岸に着く頃　雅
ウ　語り合ふ菊人形の出来映えを　世
もの言ひたげな瞳可愛く　雅
楚々としてそれでシングルマザーなり　淳
婚活などに頼らなくとも　を
残業の減つて気になる肥満型　世
除夜詣には百段の階　淳
月の影寒猿照らす甲斐の山　雅
酔ひが廻つて文字の講釈　淳
あの国の世継のことはさておいて　を
日本に向かふミサイルの怪　淳
幾代にも花は花だと嘯けば　を
廉太郎聞くうららかな午後　世
ナオ　半島の棚田に揺るる蝌蚪の紐　雅
大判小判ざつくざつくと　を
政権党続く論争声高に　世
止まつてしまつた思考能力　淳
チョコレート囓るをんなの汗を拭き　を
薔薇敷きつめた新床の夢　淳
一瞬に回り舞台は暗転し　雅
九体仏在り故郷の寺　を
母親の残せし着物似合ふ齢　世
年の用意も滞りなく　雅
留学生月を肴にチリワイン　世
鰯も鱸も出世魚なり　淳
ナウ　松虫の尺八の音も添ふごとく　を
暮し穏やか三径の内　雅
金婚の旅は北から南まで　世
地図の上にて結ぶ子午線　淳
ひとひらの花に命を吹き込みて　恭
旧友訪ね日がな惜春　執筆

連衆　青島ゆみを　武井雅子　秋山志世子
上月淳子

第十九回　猫蓑同人会作品　5～8

5・駒鳥の座

歌仙「雨音や」　松島アンズ　捌

雨音や幾筋越ゆる梅雨の川　アンズ
杜若咲く駅の改札　佳之子
紫のストラップ手に巻きつけて　美奈子
急に駆け出す犬を追ひかけ　和代
気がつけばいつしか月は天心に　秀樹
夜学の生徒齢は様々　樹
ウ 万妖祭おどけるピエロピエレッタ　奈
こんがらがった綾取りの糸　代
姉婿の味な目つきについ迷ひ　之
せつない嘘もついてきました　代
がらくたも円空作と売り飛ばし　之
うるめ一枚酌み交はす月　奈
名産の葱はいよいよ太りをり　樹
パワーに勝てぬ日本外交　之
インタビュー邪魔する蠅を鷲掴み　ア
口笛を吹く鳩と少年　奈
初花を旅の帽子に飾りける　之
十軒店に並ぶ雛市　代
ナオ ヨーイヤサー都踊の幕上り　奈
眼福口福ここに極まり　代
椅子以外四足なべて食材に　樹
勲一までは辞めぬ会長　奈
訳ありの名前に出遇ふ訃報欄　之
末の男児が跡を継ぐ家　樹
チョモランマ雲の切れ間にくっきりと　之
包（パオ）の内より細き風邪声　樹
黒髪を解きて寒紅引きくれし　奈
恋がしたいとあのピアニスト　代
鍵盤に月の光の縞模様　同
二百十日は無事に過ぎゆく　樹
ナウ 風の色ふらり絲瓜に問うてみる　奈
寅の啖呵も今はなつかし　樹
喜寿傘寿夢語り合ふ里の村　代
親子で競ふ漢字検定　之
花霏霏と和歌三神に額づけば　ア
右に左に舞へるてふてふ　奈

連衆　染谷佳之子　鈴木美奈子　長崎和代
青木秀樹

6・山雀の座

歌仙「幸福いろ」　中林あや　捌

ジューンブライド外は幸福色の雨　あや
いよよ艶やか紫陽花の玉　久美子
文学館地方史なども集めぬて　美恵
船筆削り手回しが好き　啓子
お料理はあれを是非にと月の客　常義
茶立虫らし縁の片隅　久
ウ 人形の影面白く四宮祭　同
バスストップによそゆきの児ら　義
膝小僧の擦り傷ちょいと唾をつけ　恵
横を向くだけ美しい猫　啓
くすぐったい抱かれ心地を想像し　恵
北窓閉ぢて牢のあまやか　啓
月ちりぢりぐいと呑みほす霰酒　恵
スーパーマンが飛んでゐるかも　や
脱税の裏のことまで知り尽くし　久
ゆるりくつろぐ南洋の島　義
カナリヤが籠に降る花啄めり　啓
パパも夢中でしゃぼんだま吹く　久
ナオ 憲法記念日第九条を読み返す　恵
素敵な釦しっかりと留め　や
浜風にトランペットの嚠喨と　義
海の青には染まぬ牧水　恵
湯上りの団扇せはしく旅の宿　久
女盛りの匂ふプワゾン　啓
筋っぽい男無口がよくもてて　義
牛もわたしも飽きた草食　恵
文語調聖書おごそか暖炉燃ゆ　久
コンクラーベの煙話題に　恵
砂の肩払ひもせずに負相撲　啓
月の大山浮ぶ眼裏　久
ナウ フルコース少し残してすずろ寒　同
テレホン案内やっと繋がり　恵
就活はさあこれからと励まされ　義
銘は後付け骨董の碗　啓
花日和明治の煉瓦堂々と　や
春風頬を撫でる馬車道　義

連衆　副島久美子　山口美恵　小池啓子
生田目常義

7・葦切の座

歌仙「広野かな」　横井士郎　捌

蟷螂の子の育ちゆく広野かな　士郎
縋ればゆらり揺るる虎尾草　路子
カーテンのドレープ深く縫ひ上げて　千惠子
口笛を吹き開け放つ窓　央子
雲切れてすでに半月中天に　實
やや寒の中ランナーが行く　千
ウ　赤ちゃうちん新酒を求め立ち寄らん　實
隣の席の美女が気になる　路
ニューハーフタイの都で初体験　千
手管見せぬも芸の内なり　央
園遊会紳士淑女の嘘隠し　實
冬浪蹴って護衛艦航く　路
冴え冴えと大きな空に大き月　千
ぽんぽこ鼓夢かうつつか　實
バイリンガル作家の貴ふ文学賞　路
ちょっと濃いめに注ぐ珈琲　實
花筏このまま海へ漕ぎ出でな　央
同唱十念遍路らの声　路
ナオ　香も高き草餅を売る山の茶屋　千
智に働けば角が立つとか　央
お掃除のロボットどこも丸く掃き　千
身ぐるみ剥がれ放蕩の果　路
恋病みのこけたひげ面風涼し　實
悔いなく愛し愛されて喜寿　央
金婚の陛下を祝ふタワーの灯　路
コペルニクスのやうに転回　千
鴇の雄みな本州へいっちっち　路
冷まじき日々不況しんしん　實
月の寺幽霊の軸掛け並べ　路
木の実降る池波紋交錯　士
ナウ　地の果を象が支へる世界地図　千
国語辞書では出ない日本語　央
ないものをねだる相手とねばり合ひ　實
取り柄にならぬただの早口　路
神さびし域を鎮めて花の精　士
まついか寄せる平らかな海　央

連衆　倉本路子　鈴木千惠子　遠藤央子
梅田　實

8・青鳩の座

歌仙「夏至の道」　佐々木有子　捌

先を行く影は短き夏至の道　有子
早苗蜻蛉が草に隠れる　敬子
抽象画鋭角の線交差して　文子
帆布鞄に入れるおにぎり　鐵男
夕さりの茶会の杓に十三夜　碧
そぞろ寒きを託つ挨拶　文
ウ　リュートにてルネッサンスの秋奏で　碧
退屈さうに執事拱く　男
落ちたふり相手を落すすごい技　碧
ふたり絡める粗き天網　文
曲り角どこまで続く海鼠壁　男
夜陰に乗じ密航の漢　敬
プーチンの眼鋭し月凍つる　男
薬煎じる雪音の中　文
国訛飛び交ひてをり湯治宿　碧
未だ原稿できぬ文豪　男
祝百寿大振袖に花の舞ふ　文
お玉杓子が降って来る妙　敬
ナオ　春の堂僧声明をゆったりと　碧
ひきもきらずにカメラぱちぱち　同
新しき空港で買ふ豆こけし　敬
知事の似顔絵どんなとこへも　男
そのかみの神の峰へと登山隊　文
日本狼絶えしスポット　碧
色気よりエロ気で迫る桜姫　文
刺繍ほどこす赤いたふさぎ　同
鬼も棲む噴火の島を波洗ふ　敬
鴉は何故かハンガーが好き　碧
眠りへと月の民話にいざなはれ　敬
木の実拾へば鎮もれる鐘　碧
ナウ　ブルゴーニュ・ヌーボーワイン・ロゼ・ブラン　文
※スコ坐りするおやぢ猫なり　同
脱税の手口はかうとしたり顔　男
さらさら満たすつくばひの水　敬
花の雲遙かに望む父の里　有
鍬ゆっくりと耕の人　男

連衆　須賀敬子　橘　文子　林　鐵男
松本　碧

※＝十二ページに註

第百十回　猫蓑例会作品　1～4

1・花合歓の座

歌仙「金魚は」　青木秀樹　捌

藻に隠れ金魚は何を思索する　秀樹
障子を通す西日やさしく　ジョウ
郵便夫バイクの音を響かせて　志世子
左利きだととかく不自由　千惠子
繊月に針落つるごと砂時計　わこ
ケータイで撮るジンジャーの花　千
ウ　下校の子飛蝗を追って遠回り　世
ここから出たらだめと線引く　千
都々逸で恋の手管を指南され　わ
酒がたらぬか酔ひが過ぎたか　千
読経する和尚の声に来る狸　ジ
雪晴るる森青白き月　世
平積みの1Q84立ち読みし　わ
オープンカフェで啜るコーヒー　千
裂織はエコの暮しにぴったりと　わ
汚染されてる屋久島の雨　ジ
耳当てて大樹の花と対話する　千
知恵貰には親がつきそふ　わ
ナオ　春眠の夢の続きを語る友　世
マンモスが居る始祖鳥も居る　樹
五次元の世界をつむぐ新理論　ジ
蕎麦打塾に通ふ碧き眼　世
サミットの写真の端で苦笑ひ　樹
梅雨が明ければ選挙戦なり　ジ
山蛭が臍に吸ひつく露天風呂　千
銭も心も奪ふジゴロか　樹
モンローは博愛主義で幸薄く　わ
互ひ違ひに通す靴紐　樹
自転車にET乗せて月めざす　ジ
紅葉の錦ふる里の村　世
ナウ　田仕舞にすっきり洗ふポンプ井戸　わ
ゲームソフトに行列の子ら　千
やりくりは二人三脚老夫婦　世
鶯餅は家ごとの味　わ
初花に会へて浮き立つ旅心　樹
あしたはあした風光るらん　千

連衆　林ジョウ　秋山志世子　鈴木千惠子
横山わこ

2・山百合の座

歌仙「梅雨明け」　坂本孝子　捌

対岸の眩しく梅雨の明けにけり　孝子
片陰ひろひ歩く下町　雅子
大ホール器楽合奏巧みにて　郁子
書庫の小窓にブレイクの人　常義
ゆったりと雲間に月の見え隠れ　昭
猛者を相手に秋の一局　英子
ウ　新走五臓六腑にしみてゆき　雅
彼の思ひ出ほろとこぼるる　郁
銀縁の眼鏡はキスに少し邪魔　義
ゴシップメーカーいつもご盛ん　英
教会の尖塔あたり鴉群れ　郁
月光凍てて砕く政界　義
角巻は母のぬくもりニッキ飴　同
写真撮り溜めまた次の旅　雅
珍しく横断鉄道ちゃんと来て　昭
一年ぶりよ禁煙の友　雅
文書課は上野の花見かかさずに　英
地図ものどかに子規庵を訪ふ　昭
ナオ　近代化追求の果て昭和の日　義
ささやかだった大衆の夢　雅
夕めしは肉じゃがといふホームラン　義
人より高価犬の装ひ　郁
変身の整形手術うまくゆき　英
地獄の門を開く炎昼　義
老いたれど消えぬ煩悩男には　郁
君によく似た子を産ましめん　義
金王朝そろそろ世代交代か　雅
たださらさらと砂時計落ち　同
遠く来て円き地平に浮ぶ月　郁
溢れ蚊叩く兵の髭面　義
ナウ　菊五郎一座演ずる村芝居　英
何にでもある偽と本物　昭
玉手箱疑ひもなく蓋をとり　雅
博物館に響く靴音　郁
ダンスダンスダンス皆快き花疲れ　孝
ふはと刈られし羊毛の山　英

連衆　武井雅子　東　郁子　生田目常義
松原　昭　佐古英子

3・夏椿の座

歌仙「芭蕉の間」　本屋良子　捌

妙照寺

正座して蚊の為すままや芭蕉の間　良子
風通りゆく苧の袖　佳之子
いつせいに噴水高く上がるらん　恭子
双眼鏡でのぞく大打者　酔山
子守唄優しくうたふ軒の月　一枝
茴香の実のふつとかをり来　之
ウ　冬支度鍵の壊れた箱を開け　恭
集合写真いつも隣に　山
死ぬほどに好きだと云うて先に逝き　同
可愛い顔で寝言歯ぎしり　恭
きんつばの少し塩味伊勢土産　之
凍月連れて蒸気機関車　山
白鳥語話す翁の丸き背な　枝
党の秘密をさぐる裏口　恭
折れ線のグラフ下降を止められず　山
残る氷の有るか無きかに　枝
初花の一枝手向ける西行忌　之
落第したと笑ふ我が子よ　山
ナオ　朝寝から覚めても夢はミュージカル　恭
タップダンスの靴は特注　之
股割りの辛さ力士の愚痴話　山
母の手紙はいつもひらかな　恭
しみとほるがつくら漬のてんこ盛り　枝
誰を待つのか小さき寒禽　恭
愛といふ解決のない長い旅　同
ヒースの丘に魅かれ合ふ魂　枝
原爆で焦げしロザリオ祀られて　之
黄昏どきは霧を聴きをり　良
ぶだう酒を醸せば想ふ月の故郷　恭
刈田の道をハイブリッド車　之
ナウ　ひたすらに愚を極めたる師でありぬ　山
遺品の中に蛸の吸出し　之
宝くじ何枚買へば当たるやら　山
万歳三唱控へ目にする　枝
茶の銘は祖母昔とふ花筵　良
風船ふはり遊ばせる空　枝

連衆　染谷佳之子　式田恭子　吉田酔山
西田一枝

4・百日紅の座

歌仙「この道」　橘　文子　捌

師の跡を辿るこの道青田風　文子
一際高く初蝉の声　明子
稀覯本棚の中央塞ぐらん　美奈子
絵具盛り上げ描く自画像　吉文
シャトルから眺むる月のくっきりと　未悠
銀漢の尾に送る挨拶　奈
ウ　葡萄酒を醸す香りの漂ひて　明
落書怪し僧院の地下　奈
愛してる呪文のやうに唱へられ　文
知ってしまった騙す快感　明
サーカス団テント暮らしに熊虎も　悠
氷面鏡には月の泣き顔　奈
決められぬ総理の椅子の軽きこと　明
年金問題いつも心配　吉
古希祝運転免許取得せる　同
毛振り三代相務め候　奈
チェス名人パソコンに勝ち花を浴び　吉
草餅とお茶運ぶロボット　悠
ナオ　浅蜊採り深川拓く八右衛門　奈
畳博士の畳礼賛　文
健診のマンモグラフィーしかめ面　悠
横文字多く意味不明なり　明
泡盛を海辺で呷る男共　悠
挑発水着視線引きつけ　吉
扉にはドントディスターブ掛けしまま　奈
最後もマイケルお騒がせです　吉
謎の謎忘れ形見は何某似　悠
頂けるなら竈の灰まで　明
私の名覚えし鳥と月の中　同
鬼頭魚（しいら）に乗ってメルヘンの国　吉
ナウ　秋深し夢にも大き父の背　奈
おいなりさんは常にご馳走　吉
富士の山世界遺産になり損ね　悠
温泉旅館で続く卓球　明
花爛漫禁葷酒なる門に凭り　文
カレイドスコープシャボン玉飛ぶ　悠

連衆　野口明子　鈴木美奈子　永田吉文
棚町未悠

第百十回　猫蓑例会作品　5～8

5・茉莉花の座

歌仙「遠きこと」　近藤守男　捌

遠きことにひとはやさしい杜若　守男
　ふと肩に来て止まる夏蝶　千町
三時打ちオルゴール曲奏づらん　央子
　おもたせケーキ味よきを褒め　實
月中天朗詠会も闌に　政志
　外車が好きな夜学出身　央
ウ週末はもっぱらはげむ秋手入　實
　胸の奥処に棲まはせる人　町
お見合の写真を返す叔母さんに　志
　金婚式の上さんと俺　央
期待する輪廻転生次の世を　志
　懐手して店番をする　實
繊月の下狐火の二つ三つ　町
　小泉八雲全集の書架　央
とりあへず健康診断行ってみる　町
　定量以上やらぬ晩酌　實
サーブ決めテニスコートに花の渦　央
　春泥の跡駐在の靴　志
ナオ地の神へ還すごとくに種を蒔き　町
　ラヂオを腰にマイウエイ聴く　實
売り出しにポイントカード五倍つけ　志
　正門にある百獣の王　町
子沢山みんな日焼けで白い歯で　同
　DNAは人の履歴書　志
紅の絹あふれしめ乱れ箱　町
　閨の座敷に艶の静寂　央
梟の鳴き真似しつつ門を出る　町
　向うにまはす七人の敵　央
国境の山くっきりと望の月　實
　松茸飯を支度する婆　志
ナウ場所取りは僕の番です運動会　央
　数独パズル刻を忘れて　實
無住寺の観音の御手欠けおはす　町
　もういいかいと鬼になりし児　實
くねくねと下る外湯は花筏　守
　朝寝の背伸び力いっぱい　央

連衆　原田千町　遠藤央子　梅田　實
　峯田政志

6・向日葵の座

歌仙「祭笛」　山口美恵　捌

祭笛着崩れ頃の路地の奥　美恵
　爪先立ちにのぞく凌霄花　暁巳
スイーツと呼べば甘味もお洒落にて　久美子
　優等生がなぜか叱られ　ゆみを
満月に浮かぶ兎を絵手紙に　アンズ
　爽籟抜ける小さき文机　巳
ウそぞろ寒出航のドラ鳴り渡り　久
　帽振る人は眉目秀麗　巳
智に角が立つ官僚に心揺れ　を
　媚薬も混ぜるセラピスト吾　久
銀行の屋上広き有機畑　ア
　千両万両色の鮮やか　巳
ふつふつと煮る寒糊に月の影　久
　雀の婆もアラ古稀となり　ア
いつからか津軽じょんがら鼻唄で　を
　電動自転車坂道も楽　久
向かひ来る中将桜の花吹雪　を
　蝶・虻・すがる曼荼羅の中　ア
ナオ野遊のママ友同志打ち解けて　久
　風船売りはうつらうつらと　巳
藁しべでちょっと長者になった夢　を
　どうあがいても政権交代　久
プラハ城カレル橋にもパフォーマー　巳
　髭にビールの泡がいっぱい　ア
まかせとけここは俺の奢りだぜ　巳
　無常迅速無常迅速　を
寿貞尼の誠をひしと受けとめん　久
　整形前のあなた大好き　ア
理髪師の剃刀研ぎて仰ぐ月　巳
　オペラシーズン秋深みゆく　ア
ナウ週末は遠距離介護さはやかに　久
　回転ずしの皿を数へる　ア
ストラップスポーツバッグにじゃらじゃらと　同
　早寝早起ラヂオ体操　久
花筏流れ変へやる鯉の口　恵
　富士山麓に風のうららか　を

連衆　島村暁巳　副島久美子　青島ゆみを
　松島アンズ

平成二十一年七月十五日
江東区芭蕉記念館

7・睡蓮の座

歌仙「船番所」　山本要子　捌

梅雨明けや千住の宿の船番所　要子
一本箸で心太食ふ　路子
ケータイをマナーモードに切り替へて　泉子
弦楽合奏呼吸合はせる　士郎
よい月と挨拶をする警備員　達子
ビルの屋上鵙の早贄　士
ウ　曼珠沙華触れれば何か起こりさう　泉
あたしは金のかかる女よ　達
見染められ旧家の嫁の修業して　泉
屋敷神へと運ぶお供物　路
ウルムチに砂漠の風の渦を巻き　士
歩哨の靴を撫でる凍月　泉
死んだふり熊を逃れて呷る酒　士
五臓六腑は欣喜雀躍　路
イチローはやはり日本のサムライだ　泉
ドンドンカッカと太鼓打つ人　路
里山をひと夜で埋む花の群　士
新物が出た釘煮いかなご　達
ナオ　ふろしきの代りに春のスカーフを　泉
いろとりどりの色紙を折る　士
蘊蓄を孫に教へるご隠居さん　泉
シルバー免許ハードルが増え　同
水茎のまこと涼しき借用証　達
装飾品はどれも安物　路
恋占ひカードはどれも吉なのに　同
白馬の王子ふいに現はる　要
草食の男ばかりで減る人口　泉
夢も希望も薄れゆくなり　路
瀬戸内の島また島に月ひとつ　同
穴感ひする蛇と散策　泉
ナウ　虫の音を外科病棟で味はへり　士
脇に積まれし古事記万葉　達
エコ旅行プランはネット検索で　泉
クッキーを焼く香りただよふ　達
花浴びて飛び出す絵本続み聞かせ　要
糸切れた凧遠ざかる空　士

連衆　倉本路子　青木泉子　横井士郎
篠原達子

8・玫瑰の座

歌仙「巴里祭の」　鈴木了斎　捌

巴里祭の酒を隅田に注ぎけり　了斎
歌流れゆく晩涼の頃　淳子
からくりのブリキの鳥が羽搏いて　葵
卵に目鼻俺と似た顔　忠史
母は右父は左に月は上　有子
たうもろこしの育つ早さよ　有
ウ　牧閉す錆鍵ぎぎときしみつつ　淳
爪研ぐ猫を飼ひならす日々　葵
あなたよりダイヤモンドの方が好き　史
過去をぺらぺらおしやべりな夢魔　葵
適職は政治家と卦にあらはれて　有
大ガード下ともる冬の灯　淳
空風（からかぜ）にやつれた頬を照らす月　同
刀工の名を継ぐ三代目　史
正念場しやうねんぢやうと読み違へ　斎
エコの隣でエゴが暗躍　葵
花の駕籠花見る人と担ぐ人　史
通学の子が春泥に入り　有
ナオ　雲梯を渡れば山の笑ひたる　淳
二と十を指す長短の針　史
看護師は颯爽と裾ひるがへし　淳
古い鞄のもとは何色　有
遠浅の白砂に四駆走らせて　淳
夏休はや終はる夕暮　史
ジェラートのとろりとろけるカフェテラス　葵
君をつかまへ鳥籠に入れ　有
待つだけの恋ゆゑ逢へばいよよ燃ゆ　斎
思ひ出せない数式の解　葵
満月に一筆書きのナスカの絵　同
幻めいて砧打つ音　史
ナウ　鬼灯を鳴らして偲ぶ遠き故郷（くに）　淳
キャラメル工場休むひまなし　有
托鉢の僧の真贋謎のまま　同
無念無想のやうな古代魚　葵
篝火に火の粉と花ともつれ舞ひ　斎
紙風船の朱をとんと突く　史

連衆　上月淳子　石川　葵　根津忠史
佐々木有子

事務局だより

●今後の予定

・東明雅先生七回忌追善正式俳諧
十月二十一日（水）
十一時～十七時半（受付十時より）
於　江東区芭蕉記念館

・平成二十二年猫蓑会初懐紙
一月十七日（日）
十二時～十七時（受付十一時より）
於　ホテルフロラシオン青山
港区南青山４・１７・５８
ＴＥＬ０３・３４０３・１５４１

・平成二十二年亀戸天神藤祭正式俳諧
四月二十五日頃

●猫蓑会運営体制　平成２１～２２年度

会　長　青木秀樹（総括・猫蓑作品集）
副会長　原田千町（総括補佐・猫蓑同人会）
同　橘　文子（総括補佐・深川連句会）
顧　問　東　郁子
理　事　島村暁巳（渉外・ホームページ）
同　式田恭子（事務局）
同　林　鐵男（会計）
同　鈴木了斎（猫蓑通信）
監　事　近藤守男（会計監査）
同　梅田　實（同）
運営委員　鈴木千惠子（深川連句会・猫蓑作品集）
同　遠藤央子（事務局）
同　佐々木有子（事務局・猫蓑通信）
同　横井士郎（ホームページ）
同　松原　昭（猫蓑作品集・猫蓑通信）
同　内田遊民（会計）

●猫蓑作品集第二十号原稿募集

・応募用紙　Ｂ４判指定原稿用紙（猫蓑通信のこの号と一緒に送付）・またはワープロによる原稿（Ｂ４サイズ）。
・形式自由　一人一巻（歌仙までの長さとする）。
・平成二十年十二月以降の猫蓑会員の捌き作品。
・作品の書式は作品集十九号を参照し、同様にしてください。最初に捌きと一連の作者名をフルネームで書いてください。**自他場、季、句番号などは記入しないで**ください。
・新かな、旧かなの別を明記してください。
・締切　平成二十一年十一月三十日
・応募に際しては、猫蓑通信第七十三号、また猫蓑会ホームページ内「連句の規則」等に掲載の「猫蓑会式目」を参照の上、**あらかじめ十分な校合をされるよう**お願いします。
・送り先　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
ＴＥＬ　０３・３３０９・０９５３

●猫蓑会名簿

今年七月より、現在の個人情報に関する状況を踏まえ、各人への配布を中止しました。問合せ等は事務局にご連絡下さい。また連衆の住所等は一座の折に各人にお問い合わせください。

●猫蓑通信配布方法の変更

この号から、発行日を毎号発行月の十五日とし、直接各会員の自宅に送付することになりました。

●寄贈

林鐵男様より男子羽織、着物をいただきました。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

深川連句会・十万円　匿名・一万円
山寺たつみ様・五千円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●訃報

会員の高瀬美保様が、九月二十日にご逝去されました。つつしんでご冥福を祈ります。

●新会員

由井　健　東京都練馬区
佐藤順一　新潟県小千谷市

●移転

若林文伸　栃木県小山市

作註
七ページ　歌仙「夏至の道」の巻　ナウ二句目
※スコ坐り＝スコッティフォールドという種類の猫の坐り方。ソファに背をもたせて手足を投げだし、くつろぐ人の坐り方に似ている。

季刊　『猫蓑通信』第七十七号
発行人　猫蓑会　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
編集人　猫蓑通信編集部